

令和7年度 立川市立立川第八中学校 学力調査等の分析

1 令和7年度全国学力・学習状況調査

教科	分析結果（生徒の実態や課題等）
国語	<ul style="list-style-type: none"> ○全国の平均正答率は 54.3%、東京都は 57%、本校は 58%と東京都とほぼ同じ結果となった。 ○書く内容の中心が明確になるように、内容のまとまりを意識して文章の構成や展開を考えることができるかという問題の全国正答率は 63.3%、東京都 67.4%に対して本校は 74.5%と高い結果であった。 ○文脈に即して漢字を正しく使うことができるかという選択問題の正答率は全国 35.2%、東京都 40.6%に対して本校は 30.9%と低い結果となった。 ○資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫する、思考・判断・表現の問題は全国、東京都の平均と比べて本校は低い結果であった。 ○以上のことから文脈から類推して答えを導き出すこと、相手に伝わるように表現する記述力に課題があるといえる。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ○全体を通しての全国の平均正答率は 48.3%、東京都は 53%で、本校は 52%であった。 ○学習指導要領の領域別に正答率をみると、 <ul style="list-style-type: none"> 「数と式」では全国の正答率は 43.5%、東京都は 49.1%で、本校は 44.7% 「図形」では全国の正答率は 46.5%、東京都は 51.4%で、本校は 49.1% 「関数」では全国の正答率は 48.2%、東京都は 52.4%で、本校は 55.2% 「データの活用」では全国の正答率は 58.6%、東京都は 63.1%で、本校は 62.4%であった。 ○図形や整数の性質の証明問題での正答率が約 30%で低い。読解問題や証明問題を反復して、論理的に考え、筋道を立てて考察する力を伸ばす必要がある。 ○確率を求める問題の正答率が都平均より大きく下回っていた。2年生の単元で、求め方が定着していない。既習事項の復習で課題がある。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ○塩素の元素記号を問う問題の正答率は全国 44.9%、都 47.3%、本校 58.9%、など知識を問う問題などで全国や都より高い正答率がみられた。 ○身近な生活との関連に着目した振り返りを書く問題では、全国 79.4%、都 80.3%、本校 92.9%、また、言い伝えが科学的に正しいと判断するための理由の記述問題では、全国 42.2%、都 43.2%、本校 51.8%と高い正答率がみられた。 ○電熱線の発熱について知識・技能が身についているか問う問題では正答率、全国 51.9%、都 52.0%、本校 39.3%と 10 ポイント以上低い結果となっている。 ○実験結果から判断し、化学変化をモデルで表す問題では、全国 35.5%、都 38.1%、本校 25.0%と低くなっている。 ○以上のことから単に知識を問う問題や、記述問題はできる傾向があるが、身につけた知識と技能を合わせて考える問題や、実験結果から思考・判断して、モデルとして表現するなど、いくつかの能力を合わせて総合的に判断し、表現することに課題があると考えられる。

2 令和7年度「東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動・習慣等調査」

教科	分析結果（生徒の実態や課題等）
保健体育	<ul style="list-style-type: none"> ○1年生で男女ともに全国平均を上回っていたのが握力、男女ともに全国平均を下回っていたのが、50m走・持久走・ボール投げ、立ち幅跳び・反復横跳びであった。2年生で男女ともに全国平均を上回っていたのが立ち幅跳び、男女ともに全国平均を下回っていたのが、50m走・持久走・ボール投げ・反復横跳び・長座体前屈・上体起こしだった。3年生で男女ともに全国平均を上回っていたのが立ち幅跳び・反復横跳び、全国平均を下回っていたのが、50m走・持久走・上体起こしだった。以上のことから、全校的に体力が低下しており、特に走力や全身持久力に課題があることが分かった。 ○生活・運動・習慣等調査では、運動やスポーツに好意的である生徒が全学年で 80%以上となり、体を動かすことが好きな生徒が多い一方で、「自ら進んで運動やスポーツに取り組んでいる」や「ほとんど毎日運動している」と回答した生徒は約 50%にとどまっていた。以上のことから、具体的にどのような運動・スポーツが身近にあり、どこに運動を行う環境があるのか、運動することの価値は何かを伝えていく必要があると考えられる。

3 東京ベーシック・ドリル

教科	分析結果（生徒の実態や課題等）
数学	<ul style="list-style-type: none"> ○1年：平均正答率は 48.8%であった。領域別にみると「数と計算」では正答率が約 60%で高かった。「図形」、「関数」「データの活用」では正答率が 50%を下回っていた。基本的な計算力は定着しつつあるが、図形の求積問題や度数分布表の読み取り、関数分野において課題がある。単元ごとに復習を徹底して基礎基本の確実な定着を図る必要がある。 ○2年：平均正答率は 57.2%であった。領域別にみると「数と計算」では正答率が約 70%～80%、「図形」で約 70%で高かった。「関数」ではグラフを書く問題の正答率が低かった。「データの活用」ではヒストグラムの読み取りで多くの生徒が正しく読み取れていなかった。基本的な計算力や図形の知識は定着しているが、「データの活用」の単元での復習が今後必要である。

4 定期テスト

教科	分析結果（生徒の実態や課題等）
国語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1年：定期テストでは漢字の読み書き問題の正答率が極めて高かった。また、基礎的な文法問題、接続詞を文脈から類推し、適切なものを選ぶ問題等も高い正答率であった。一方、比喩表現が表す意味を詩の内容から考え説明する問題などの正答率は低かった。このことから本文、文章構成を理解したうえで、自分の語彙で説明する問題など「書いて表現する」ことに課題が見られる。 ○ 2年：思考を必要とする課題に、取り組む前に諦めてしまう。粘り強く考えようとする姿勢に課題が見られる。 ○ 3年：歴史的仮名遣いなど古典に関する内容や、文章での適切な漢字の使用など、知識の定着に課題が見られる。 思考を必要とする課題に、取り組む前に諦めてしまう。粘り強く考えようとする姿勢に課題が見られる。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 定期テストに向けた学習では、意欲的に取り組み、用語を覚えて答えることは概ねできる。知識を基に、思考し、文章化して表現する問題には若干苦手意識がある。 ○ 知識を問う問題では、多くの生徒が重要語句を覚え、正答率は高くなっている。資料から読み取れることを表現したり、事象の背景を説明したりする問題の正答率は若干低くなっている。 ○ 単元の基礎的な知識等が定着していない生徒も若干名おり、知識定着の二極化が課題である。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1年：基本的な計算や技能は身に付いている生徒が多い。一方で、思考・判断・表現を問われる問題の正答率が低い。身に付けた知識を活用して解く問題に苦手意識がある。 ○ 2年：基本的な計算の能力は身に付いている生徒が多い。一方で、思考・判断・表現を問われる問題の正答率に、大きく差がある。習熟度に応じて、既習の学習内容を踏まえて、思考力・判断力・表現力を身に付けさせることが課題である。 ○ 3年：基本的な計算の能力は身に付いている生徒が多い。一方で、思考・判断・表現を問われる問題の正答率は、習熟度別授業のクラスによつて、正答率や無回答率に大きく差がある。習熟度に応じた学習内容を踏まえた上で、学習内容を発展させたり活用したりすることが課題である。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1年：学習に対する意欲がある。授業中の取組も意欲的である。知識・技能、思考・判断・表現ともに6割程度の正答率である。この状況を維持するために小テストやレポートを適切に行い、学習状況の安定を図る。 ○ 2年：授業中の学習に対する意欲はある、家庭学習による復習などはあまりしている生徒としていない生徒で差がある。全体的な知識・技能の正答率は昨年度の2学年と比較し上がっているが、二極化している。授業中に知識を確認する小テストなどを増やし、基礎的な内容の定着をはかりたい。 ○ 3年：学習に対する意欲があがり、勉強してきた成果が見られ、知識・技能を問う問題はよくできていた。思考・判断・表現を問う問題については、苦手な生徒があり、結果として全体の点数も、出来・不出来の差が大きく開いてしまった。得点力のない一部の生徒の底上げをするよう、基礎。基本のくり返しの練習を授業でも取り入れ、個人的にも取り組ませるよう手助けすることが課題である。
音楽	<ul style="list-style-type: none"> ○ 歌唱など実技を伴った活動についての解答は、多くの生徒が正解している。その一方で、鑑賞教材、楽典、リズム創作などは、テスト前の取り組み方によって差が生じている。 ○ 授業で積極的に表現活動ができるようになると、定期テストに対しても意欲的に行えるようになるという傾向が見られる。 ○ 授業でのグループワークなどを通して、生徒同士で意見を共有し、全体の底上げを図る。
美術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 知識を問う問題に対しては、基本的な内容の理解はもちろんだが、授業内での表現活動を通して深まりのある力を身につけることが求められる。また実技を伴う問題について、特に描く技能が向上するよう、スケッチトレーニング的な取り組みをワークシートにより実施する。 ○ 鑑賞に関する能力を高めるために、作者の思いをより感じ取れるよう、対話による鑑賞の機会を設定する。
保健体育	<ul style="list-style-type: none"> ○ 知識を問う問題では、記号問題の正答率は高いものの記述式の問題は正答率が低い傾向だった。技術の名称等について授業で聞くことはあるものの書いたり発言したりする機会が少ないので、記述の苦手な生徒がいると考えられる。授業のはじめにおこなう前時の復習において、生徒が発言させたり、プリント等に書かせたりするなどの授業改善が必要である。 ○ 思考・判断・表現の問いで、昨年度に比べ、しっかりと自分の考えたことや授業で説明したことを書ける生徒が増加した。引き続き、毎時間の学習カードに取り組んでいくとともに、どのようなことを意識して取り組んでほしいかを授業のはじめにしっかりと伝えていく。 ○ 主体的に学習に取り組む態度を問う問題では、記述している生徒がわずかに増加した。今後もグループや個人の振り返りの時間を確保していく。
技術家庭	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3年生は、基本的な事柄について理解できている生徒が多かった。2年生は知識を問う基礎的な問題が答えられない生徒がみられた。1年生は知識を問う記述問題の正答率が低い傾向だった。 ○ 思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度の記述式の問題はよく考えしっかり答えられている生徒が多かった。 ○ 授業中の真面目な取組が得点に結び付いていない生徒が多いので、テスト前に復習問題等を行い、知識や技能を定着させ得点の向上を図る。
外国語	<ul style="list-style-type: none"> ○ 定期テストでは「聞くこと」の正答率がとても高かった。また、選択肢の中から正しい綴りを選ぶ問題では、正答を選ぶことができる生徒が多かった。一方、肯定文を疑問文や否定文に書き換える問題など「書くこと」に関する問題は正答率が下がった。同じ問い合わせを口頭で問う「話すこと」のテストでは、正しく答えられたため、正しい綴りを用いて解答することに課題があると考えられる。 ○ 「聞くこと」「読むこと」に関する問題の正答率が高かったのに対し、「書くこと」に関する問題の正答率はかなり低く留まった。また単語を並べ替える問題や、単語を正確に記入する問題の正答率も50%以下であった。以上のことから、生徒は英語で話されたことや書かれたことを理解することは得意としているが、自分の考えを正確な語順、正確な綴りを用いて表現することに課題があると考えられる。 ○ 「聞くこと」については、リスニング中にメモを取ることで内容を整理し、理解する力が付いてきた。短縮形や熟語を習得することで、消える音、つながる音にも対応していくと考える。「書くこと」については、特に長い単語の綴りの異なる定着が求められる。類義語や反意語等と結びつけて語彙を増やしていくことも必要だと考える。「読むこと」については時間を意識して、長文にも少しづつ対応できるようになってきているが、速読や概要理解などについてはまだ課題が見られる。